

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

あの頃ボクは若かった

松橋 達也

十一月に入り、「年賀状販売中」という赤いノボリ旗が街の随所ではためくようになった。えっ、もう年末か。毎年この繰り返しである。つくづく一年が経つのが早いと感じる。最近、中途半端な早朝に目が覚めてしまうことが増え、このままではあつという間に年老いてあの世の生活が始まってしまうという漠然とした不安感とともに、自分はこのままでいいのだろうか、ひとり真剣に考えるようになった。あの頃とおなじように。

段ボールと新聞紙、牛井チェーンの一杯五〇円の味噌汁、米の無人自動精米所。

これらは皆、私の中において温かいものというくりに入るものであり、十代最後の年に、放浪生活をしていた私のほろ苦い記憶を呼び起こすキーワードでもある。

真冬の公園。ベンチに一枚の段ボールを敷き、新聞紙を身体に巻き付ける。そして少し大きめの段ボールを手で揉み柔らかくしてから布団代わりに、仰向けの身体に掛ける。星空にすいよせられ宇宙をさまよっているかのようなきれいな星だった。この星空。そして段ボールと新聞紙の歩き疲れた夜。何もかも嫌になり絶望感を抱きつつ、入った深夜の牛

たと思う。そんな自分が、だんだんひねられていったのは、現代では中二病といわれているらしいが、十四歳の夏、親父は兄貴と弟とは仲良く話をするのに、私と話すときはいつも怒り口調だった。私だけが可愛がられていないと勝手にひがんだ。両親、とりわけ父親に対する嫌悪感の半端ではなかった。当時流行ったチエッカーズの曲のように「ナイフみたいに尖ってはさわるもの皆傷つけた」そんな状態だった。後に父が真顔で「背後から刺されるのを毎日覚悟していた」と語ったくらいだ。



時は過ぎ高校三年生の夏。周囲の話題がいつの間にか好きな女の子から大学受験に変わっていた。以前から、父親のように早朝から満員電車で揺られて都内まで通勤するサラリーマンだけにはなりたくない、という漠然とした気持ちは持っていた。「自分はどうか生きていきたいのか。何をしたいのか。すべきなのか。」小

学校の先生、獣医、海上保安官等など、いくつかがやってみたいと思う職業は思い浮かんだが、理数系が苦手な成績の自分には無理だとさつと諦めた。加えて、うちは貧乏だから国立大学、しかも自宅から通える大

学以外には行かせられないと言われていた。これでは千葉大学以外はダメだと言っていることと同じだ。さあ困った。反発ついでに高卒で家を出て働くという手段もあったはずだが、まだ社会に出て働くという勇気はなかった。今にして思えば随分勝手な息子だ。ことごとく親に反発し

敵対心を抱きながらも、とりあえず親のすねをかじって生きていく道を

選択したのでから。

結局、考え出したのが当時国公立大学にはなかった学部である、私立の社会福祉学部への入学志望だった。我ながらよくも考えたと思うが、社会福祉に全く興味がなかったわけではない。人と繋がり、人のためになる仕事がしたいと思っていたし、東京都の千葉福祉園や袖ヶ浦福祉センターのすぐ近くに住んでいたため、幼少期からそこで暮らす人たちの遠い存在とは思っていなかった。そして、これからは高齢化社会が到来する。老人福祉論を学んでお年寄り相手に儲けてやろうという野心も抱いていたのかも知れない。

両親に精神的にも金銭的にもかなり無理をさせ入学した大学だったが、そもそも動機が不純だったし、アクアラインも無い時代、やたら通学に時間がかかった。そして何よりもバブル期の都会の華やかな空気に馴染めなかったこともあり、あつてなく、一ヶ月足らずでキャンパスから足が遠のいた。その後は、父親との確執を勝手に深め、些細なことに言いがかりをつけ口論の末、家出。放浪生活が始まったのだ。

そんな生活に区切りをつけたのは二十一年前のちようど今頃のこと。当時所持金が無くなるまで横浜の大きな貨物駅で日雇い仕分け工をしてきた。そんな自分を案じてくれた高校時代の仲間が食事に誘ってくれた。た「袖ヶ浦福祉センター職員募集」送迎用の大型バスに貼られた一枚のチラシ。ただ昔から知っていたとい

うだけで、特に深く考えもせず、翌々日には履歴書を提出していた。

私は仲間借りただばだばのスーツに身を包み、千葉県袖ヶ浦福祉センターの職員採用試験を受験し、そして採用された。二十一年前といえ

現実などまだ知る由もなく、街には人と活気が溢れ、飲み屋街では焼き鳥の煙で煙いほどだった。一流企業を中心に優秀な学生を確保するために、あの手の手を使い、時には研修という名の海外旅行まで準備して学生たちを集めていた時代である。つくづく運が良かったと思う。今の時代であれば書類選考で完全にアウトである。



初めての職場での出会いが今の里見理事長。養育園という児童施設だった。配属された翌月には寮の宿直業務を独りで任されるようになる。二〇歳になったばかりの若造の未熟な人間力はすぐに見抜かれる。入居している子どもたちからは数々の手荒い歓迎を受けた。先輩職員が宿直の時は何事もなく落ち着いて過ごしているのに。服はびりびり、腕は傷だらけなんてことは日常茶飯だった。

そんな折、「施設職員である前に社会人であれ」と社会で生きていくためのイロハを教えてくれた。そんな理事長が新しい施設を作ると聞き、お願いして連れて行ってもらった。平成五年四月のことである。

以来、現在に至るまでの間、障害福祉の制度は措置制度から支援費制度そして自立支援法に総合福祉法、たつた二〇年足らずの間に大きな変化を遂げている。しかし、変わらないのはその制度を創り動かす人間。いつの時代においても喜びや悲しみ、苦しみな感情の奥底にあるものは変わらない。同じように、私たちの仕事も、制度がいかに変わろうとも目の前にいる人をいかに大切に

かという原点には変わりがない。里見理事長にはもう一つ、「人のせいにする人生だけは送るな。自分

の器をきちんとわきまえろ。自分の器がわかっていけるなら、その器を満たそうと努力しろ。器の大小で人が評価されるのではない。その器を満たそうと努力する姿勢が評価されるのだ」と徹底的に教え込まれた。そのお陰で、この歳になりようやく少しは成長したなどと思える事がある。それは、「背伸びをしなさいというままの自分で人と向き合えるようになりつつあること」と「他人のマイナスを否定するのではなく、プラス面を認められるようになったこと」更には「人のせいにしなくなったこと」である。このことは今担当している相談業務、就業・生活支援業務にも活かされていると感じている。企業の雇用担当の方に対しては「この方の良いところ、プラスの部分の評価してください。苦手な部分、マイナスは認めたうえで皆で補っていきましよう」と自信を持っていえるようになり、保護者の方には「ありのままの本人を認め、無理をさせないようにしましょう。そのほうが自らやってみよう」という気持ちが育ちますよ。自らやってみようという気持ちが育てば・・・とうわべの言葉としてではなく、心から言えるようになったのだ。

この原稿を綴りながら気がついた。あの放浪時代を経たバブル崩壊後は「失われた二〇年」と称されることもあるが、少なくとも私の二〇年は全く失われてなんかなかった。とてもまともとは言えない自分が、少しは社会のために役立っている実感出ている。生きる糧を得るために働き始めたのだが、今は生きる喜びをも得ることが出来ている。この職に就いて本当によかったと心から思っている。

(地域生活支援センター所長)

